

はじめに

三重県は、SFTS（重症熱性血小板減少症候群）の発生が報告されている地域であり、今後も動物や人での症例が増加する可能性があります。特に、令和7年5月に県内で発生した痛ましい獣医師の死亡事例は、SFTSがもはや「遠い地域の問題」ではないことを示しています。私たちは、この現実から目を背けず、県内においてもSFTSは常に存在するリスクであるという認識を持つことが、すべての獣医師に求められます。

SFTSの診察に不安を感じるのは当然のことです。会員の皆さんの安全こそが公衆衛生を守る上で最も重要だと考えています。このマニュアルは、皆さんが安心してこの感染症に対応できるよう作成しました。SFTSをよく知り、私たちの技術をもって適切な感染防御策を講じれば、感染リスクを最小限に抑えられます。

私たちは、動物の健康を守ると同時に、人獣共通感染症の専門家として、社会から大きな期待を寄せられています。SFTSは、動物から人へ感染するリスクがある感染症であり、私たちの早期発見と適切な対応が、地域社会の感染拡大を防ぐ等公衆衛生の向上につながります。これは、獣医師にしか果たせない重要な役割です。

SFTSが疑われる症例を診察し、迷ったとき一人で抱え込む必要はありません。すぐに獣医師会の仲間にご連絡ください。私たちは、連携して必要な情報提供や、その後の対応についてサポートします。

SFTSは、正しく恐れるべき感染症です。このマニュアルには、最新の科学的知見に基づいた診断基準や対応方法がまとめられています。正しい知識と具体的な手順を知ることによって、自信を持って診療にあたることができると思います。

皆さんの安全は、まず自分で守ってください。私たちも微力ながら皆さんを守るよう最善を尽くします。皆さんと私たちの専門知識と行動力が、この地域社会を守ることにつながります。決して一人ではありません。一緒にこの課題に取り組みましょう。

令和7年9月

公益社団法人三重県獣医師会

三重県獣医師会小動物部会

最も重要な事は、
事前の準備です。

国立感染症研究所の
「獣医療関係者のSFTS発症動物対策について」
を検索し、
SFTS検査依頼書をダウンロードして
ファイルに入れておいたり、
普段より定期的に観覧しておく事を、
強くお勧めします。

不定期に更新されているので、
本マニュアルにリンクを掲載しても無意味である為、
各自で最新の情報を得ておく必要があります。

SFTS（重症熱性血小板減少症候群）対応マニュアル

1. 目的

このマニュアルは、三重県内で発生するSFTS感染症に対し、三重県内の獣医療施設において、迅速かつ適切な対応を行うことができることを目的とし、動物の健康管理と公衆衛生の両面から、本感染症の拡大防止を目指します。

2. SFTS感染症の概要

SFTS（重症熱性血小板減少症候群）は、SFTSウイルスによって引き起こされる人獣共通感染症です。主な感染経路は、ウイルスを保有するマダニに咬まれることですが、SFTSを発症した動物（特に猫）から人への感染例も報告されています。

*猫の致命率は60%程度。犬は40%以上とされる。

*猫の重症例では急速に悪化して数日で死亡する。

*痙攣発作を伴うこともあり、発作時には受傷しないよう気を付ける。

*PPEは必須であり、入院には隔離が必要。

*治療に特效薬はない。

*症状が改善してもウイルス消失には時間がかかる。（PCRで陰性確認）

*マダニに予防薬は推奨されるが完全な対策ではない。

（東京都：SFTS疑いネコ診療簡易マニュアルから引用）

3. SFTSを疑うべきケース

次のような症状を示す動物を診察した場合は、SFTS感染症を疑い、慎重に対応してください。

*主な症状：発熱、元気消失、食欲不振、下痢、嘔吐、黄疸、出血傾向

*特に注意が必要な動物：マダニの寄生が確認された動物、野外で活動する機会の多い動物（特に猫）、保護された猫

*検査所見：血小板減少、白血球減少、肝酵素（ALT、AST）の上昇

4. 対応手順

Step 1 SFTS疑い猫（犬）の診療

*SFTSが疑われる動物を診察する際は、他の動物や獣医療従事者等への感染を防ぐため、PPE着用の判断をし、診察をしてください。

*飼い主には、診察後SFTSの可能性と、人への感染リスクについて丁寧に説明し、動物への接触時の注意喚起（手袋やマスクの着用）と飼い主自身の健康状態に異変がないか確認するよう伝え、異常を感じた場合は速やかに医療機関に相談するよう説明する。

Step 2 生化学検査

*血液検体採取時は、手袋、マスク、ゴーグルを着用し、二次感染の防止に努めてください。血液検査から、SFTSを疑う場合は、確定検査依頼を行うとともに、使用器具、施設等の殺菌消毒を実施してください。

（70%エタノール、1%ビルコン、0.5%次亜塩素酸ナトリウム液）

*確定検査依頼：国立感染症研究所獣医科学部 前田 健 先生

Email：Kmaeda@niid.go.jp 原則メール対応

（電話 03-4582-2750）

送付方法→別添資料

Step 3 確定診断後の対応

*必要に応じて、管轄保健所衛生指導課に情報提供してください。また、可能な範囲で飼い主等にマダニ対策を呼びかけてください。

*消毒・清掃：隔離入院をしていた場合、施設設備や使用した器具について、ウイルス不活化効果のある消毒薬（前述と同様）を用いて適切に消毒・清掃してください。消毒薬はどれを使用してもOKです。

5. 獣医師の感染防止策

*SFTSが疑われる動物を診察・治療する際は、サージカルマスク、使い捨て手袋、ゴーグル、ガウンを着用してください。

*動物の体液（血液、尿、嘔吐物など）に直接触れないよう細心の注意を払ってください。

*診察後は、速やかに手洗い・手指消毒を行い、使用した器具を適切に消毒してください。

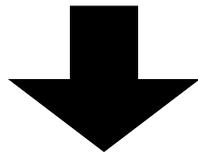
*動物に咬まれたり、体液に曝露した場合は、体調管理に努め、異常を感じた場合は、速やかに医療機関を受診し医師の指示に従ってください。

6. 普及啓発活動

*飼い主への啓発：普段からマダニの予防・駆除を徹底するよう、動物病院の待合室やウェブサイトなどを通じて呼びかけてください。

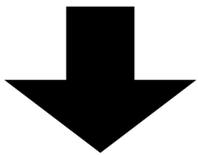
*獣医師間での情報共有：獣医師会内のメーリングリストやSNSグループ等を活用し発生速報システムを構築し、情報共有を図ります。

開業獣医師



報告

三重県獣医師会



速報

(発生支部・症例の概要など)

小動物部会会員

院内で飼い主に告知するなど啓発・予防に努める

SFTS診断マニュアル

来院動物の診察

Step 1 問診・身体検査

- *主訴: 発熱、元気消失、食欲不振、下痢、嘔吐、など
- *マダニの付着・寄生: 確認の有無
- *飼養環境: 野外での活動歴、他の動物との接触歴
- *保護動物の場合: 保護経緯 (飼い主不明猫、捨て犬など)

【疑わしい症状が見られる場合】

→ Step 2 へ進む

【疑わしくない場合】

→ 通常の診療を継続し、マダニ予防の啓発を行う

Step 2 血液検査の実施

ここからPPE装着推奨

- *飼い主への簡単なSFTSの説明
 - ・全血球数 (CBC)
- *血小板数: 減少 (血小板減少症)
- *白血球数: 減少 (白血球減少症)
 - ・血液化学検査
- *肝酵素: ALT、ASTの上昇
- *腎機能: BUN、Creの上昇 (重症例)

【上記検査所見に異常がある場合 (特に血小板減少・白血球減少)】

→ Step 3 へ進む

【異常がない場合】

→ 他の疾患を鑑別し、再検査または経過観察

Step 3 SFTSの疑似症例として対応

ここから入院推奨

*動物の隔離：他の動物や人への感染リスクを低減するため、速やかに隔離する。

*感染防御：獣医師およびスタッフは、サージカルマスク、使い捨て手袋、ゴーグル、ガウンを着用。

*飼い主への説明：SFTSの可能性と、人への感染リスクを説明し、動物への接触時の注意喚起（手袋・マスクの着用）を促す。

【強くSFTSを疑う場合】

→ Step 4 へ進む

【SFTSの可能性は低いと判断した場合】

→ 他の疾患の精査へ移行

Step 4 検体送付

*検体採取：ウイルス検査のための血液検体を採取・保管する。

*確定検査：血清0.5mlを冷蔵・三重梱包にて国立感染症研究所前田 健先生等に連絡後、指示に従い検体を送付する。

Step 5 診断結果の確認と最終対応

【陽性（SFTS確定診断）の場合】

*行政との情報共有を密にする。

- *治療を継続し、動物の健康状態を管理する。
- *院内の消毒・清掃を継続して徹底する。
- *飼い主に体調管理と陽性個体の取扱いを、再度、注意喚起する。

【陰性の場合】

- *SFTS以外の疾患を鑑別診断する。
- *飼い主への説明と、今後の治療方針を検討する。

このマニュアルは、SFTSが疑われる動物への対応を視覚的に整理したものです。各ステップの判断は、最終的には獣医師の専門的な知識と経験に基づいて行われます。このマニュアルを基に、より具体的な情報を追加することで、現場での利用価値が高まります。

SFTSが疑われる動物の隔離入院マニュアル

獣医師によるSFTSの疑似症診断

Step 1 隔離体制の準備

＊専用の隔離スペース又はケージの確保：他の入院動物から離れた場所に、専用のスペースを用意する。

＊感染防御用具の準備：隔離室の入り口付近に、サージカルマスク、使い捨て手袋、ガウン、ゴーグル、アルコール消毒液などを準備しておく。これらは入室ごとに着用し、退室時に廃棄する。

Step 2 動物の隔離・搬送

＊患者の搬送：SFTSが疑われる動物は、専用のケージや担架を使用し、他の患者やスタッフとの接触を最小限に抑えながら隔離スペースへ搬送する。

＊スタッフの感染防御：搬送に関わるスタッフは、必ずStep 1で準備した感染防御用具を着用する。

Step 3 治療・ケアの実施

＊入室前の準備：隔離スペースに入る前に、治療やケアに必要な器具・薬剤をすべて揃えておく。

＊最小限の接触：動物との接触は最小限にとどめる。採血や投薬など、直接的な接触が必要な処置は、手際よく行う。

＊使用済み器具の管理：使用済みの器具やペットシート類は、専用の容器（密閉できるゴミ箱や二重にしたゴミ袋など）に入れて管理し、他のごみとは分別して廃棄・消毒する。

Step 4 隔離室内の管理と環境整備

＊清掃・消毒：隔離スペースは、ウイルスに有効な消毒薬（エタノールなど）を十分に用いて、定期的に清掃・消毒を行う。

＊環境管理：ケージ内の排泄物や汚染されたペットシート類は、二重のゴミ袋に入れるなど適切に処分または消毒する。

Step 5 飼い主との連携

＊面会の制限：感染リスクを考慮し、飼い主の面会は原則として制限する。面会が必要な場合は、感染防御策を徹底してもらう。

＊情報共有：治療経過や動物の状態について、こまめに飼い主へ連絡する。

Step 6 退院後の対応

＊隔離スペースの最終消毒：動物の退院後、隔離室と使用したすべての器具を徹底的に消毒する。

＊スタッフの健康管理：隔離対応に当たったスタッフは、自身の健康状態に異変がないか、しばらくの間注意深く観察する。

このマニュアルは、獣医師とスタッフの安全を最優先に考えたものです。

SFTSは人獣共通感染症であり、院内感染の防止は極めて重要です。

このマニュアルを参考に、より安全な入院体制を構築してください。

獣医師が知るべきSFTSの診断基準

SFTSの診断は、臨床症状、血液検査所見、および疫学的情報を総合的に判断して「強く疑う」ことから始まります。最終的な確定診断には、行政機関でのウイルス学的検査が必要です。

1. 臨床症状（問診・身体検査）

以下の症状が複合的に見られる場合、SFTSを強く疑う必要があります。

- *元気・食欲低下：ほとんどのSFTS発症動物で見られる症状です。
- *発熱：体温が39℃以上になることが多く、特に猫では高頻度で確認されます。
- *消化器症状：嘔吐や下痢など。ただし、ヒトと異なり、犬や猫では下痢が必発というわけではありません。
- *黄疸：特に猫で高頻度に見られる症状です。
- *リンパ節の腫れ：症状の一つとして確認されることがあります。
- *出血傾向：皮下出血や鼻血などが見られることがあります。

【特に重要なポイント】

- *マダニの付着歴：最近マダニに咬まれた、またはマダニが付着しているのを確認した。
- *屋外での活動歴：野外での活動が多い犬や猫、特に保護された野良猫は、感染リスクが高いと考えられます。
- *地理的要因：西日本を中心に症例報告が多いことを考慮する。全国的な広がりを見せていますが、その場合でも局所的発生が見られる事が多いので、最近の行動範囲を知る事は重要です。

2. 血液検査所見

SFTSを強く示唆する特徴的な血液検査所見は以下のとおりです。

*白血球減少症：白血球数が異常に減少する。

*血小板減少症：血小板数が異常に減少する。SFTSの「血小板減少症候群」という名称の由来にもなっており、重要な指標です。

*肝酵素の上昇：AST、ALT、LDHなどの肝酵素が上昇する。

*その他：ビリルビン（T-Bil）の上昇（黄疸と関連）、CPK（クレアチンキナーゼ）の上昇などが見られることがあります。

*炎症マーカー：犬ではCRP（C反応性蛋白）、猫ではSAA（血清アミロイドA）の上昇が確認されることが多いです。

【留意点】

これらの検査所見はSFTSに特異的なものではなく、他の感染症や疾患でも見られることがあります。そのため、他の疾患を鑑別しながら総合的に判断することが重要です。

3. 確定診断のための検査

臨床症状や血液検査所見からSFTSを強く疑った場合、確定診断のためにはウイルス学的検査が必要です。

*ウイルス遺伝子検査（RT-PCR法）：発症初期の急性期に、血液や口腔スワブ、肛門スワブなどの検体を用いてウイルス遺伝子を検出します。

*抗体検査（ELISA法など）：感染後しばらく経ってから抗体価が上昇するため、回復期の診断に用いられます。ペア血清による抗体価の上昇を確認することで診断します。

【獣医師が取るべき行動】

*臨床症状と血液検査所見からSFTSを強く疑う場合は、直ちに、国立感染症研究所 前田 健 先生にメール連絡し、指示に従って、速やかに検体を送付する。

4. まとめ

SFTSの診断は、「SFTSを疑う臨床症状」と「特徴的な血液検査所見（特に白血球と血小板の減少）」の二つの要素が揃ったときに、最も強くSFTSを疑うことができます。しかし、これらの所見だけでは確定診断はできず、必ずウイルス学的診断が必要です。獣医師はこれらの基準を理解し、院内感染の防止と公衆衛生の向上に貢献することができます。

【参考】

東京都獣医師会では、以下の資料を会員、非会員問わず一般公開しています。

1. SFTS疑いネコ診療簡易マニュアル

<https://www.tvma.or.jp/public/items/2021.3.25%28SFTS%29.pdf>

SFTSをどのように疑うのか、疑った場合にはどの段階でPPEを装着するのかななどを解説



2. SFTS疑いネコ診療マニュアル

https://www.youtube.com/watch?v=1Pf_0GEeH7o

動画による診察一連の流れ解説、PPEの脱衣方法の詳細も解説
(YouTube 動画でPPE着脱等を見ることができます。)



検査依頼方法

血清（全血 or EDTA血漿でも可）を0.5ml 以上採取
シードスワブ等で口拭い液・肛門拭い液を採取
＊必ず治療の前に行う

採取した物を冷蔵保存
（送付までに時間がかかる場合は冷凍保存）

SFTS検査依頼書に記入し、検査機関へ連絡
国立感染研究所の前田先生（kmaeda@niid.go.jp）
＊その際に送付先の住所や宛先を確認する

SFTS検査依頼書を同梱し、基本三重梱包にて、
冷蔵便で検査機関へ送付（冷凍した場合は冷凍便）
＊ジップロック等を利用したカテゴリ-Bを推奨

SFTS 検査依頼について

伊賀支部 辻 勝彦

先般の県内の SFTS 感染症の発生をうけて、三重県獣医師会として SFTS 対策が策定され、国立感染症研究所での SFTS 検査が可能になったと知り、今回、令和 7 年 9 月に検査をお願いした。

材料

11 歳、日本猫 ♀ 外出自由 過去にダニ寄生あり ダニ予防無し

来院時ダニ寄生無し 体温 37.9

Ht 29% RBC668 WBC6100 Plt36000

ALT 47 AST 49 TBil 2.8 SAA 92.53 FIV (+)

二日前より食欲不振、ほぼ動かないとの事で来院

- ① 国立感染症研究所 前田先生にメール連絡 (kmaeda@niid.go.jp)
典型的な症状が全てではないが、依頼可能かどうか確認
- ② 同日、前田先生より返信
疑いがあるなら検査いただけると返答
- ③ 密閉容器に血清 1cc 入れ、さらに二重に密封袋に入れしっかり固定の上
冷凍便にて送付
- ④ 発送より 4 日後検査結果メールにて連絡 (別紙)
SFTSV 遺伝子検出限界以下と報告

結果

対症療法および抗生物質 (ビブラマイシン) 投与により第 3 病日より食欲改善

第 12 病日 Ht 34.7% Plt145000 TBil 0.2 SAA3.75 以下に改善

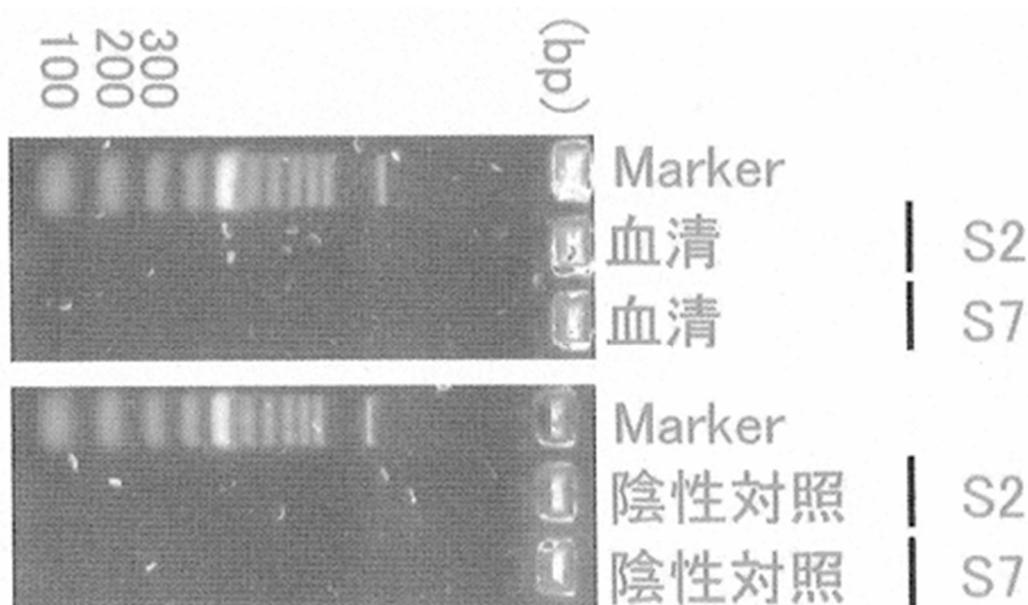
25 病日迄内服継続

今回は SFTS 感染症の典型的な症状が全てそろっていない状況でありましたが、少しでも疑いがあるならと、検査依頼をこころよく受けていただきました。

会員の先生方も疑わしい症例がありましたら、検査依頼をしてみてください。

(別紙)

検査依頼	#1692		
患者(動物)の名前:	ビーコ		
居住地	三重県	名張市	
動物種	ネコ	種類	日本猫
年齢	11歳		
体重	4.4kg		
性別	♀		
飼育環境	室内及び屋外		
マダニの寄生	過去にあり		
ノミ・マダニ 予防薬 投与歴	最近の投与:投与歴なし 製品名:		
ワクチン接種歴	最近の投与:2015年	10月	
	製品名:FCRCP		
発症年月日	2025年	9月	10日
検体採取日	2025年	9月	12日
検体:	血清		
症状:	発熱 元気・食欲低下	白血球数減少 黄疸	血小板数減少
検査データ	9月12日		
発熱 (°C)	37.9		
赤血球 (μL)	6680000		
白血球 (μL)	6100		
血小板 (μL)	36000		
ALT(GPT)(IU/L)	47		
AST(GOT) (IU/L)	49		
CPK(CK) (IU/L)	N.D.		
T. Bil (mg/dL)	2.8		
	SAA 92.53		
発症からの経過 気づいた点	FIV (+)		



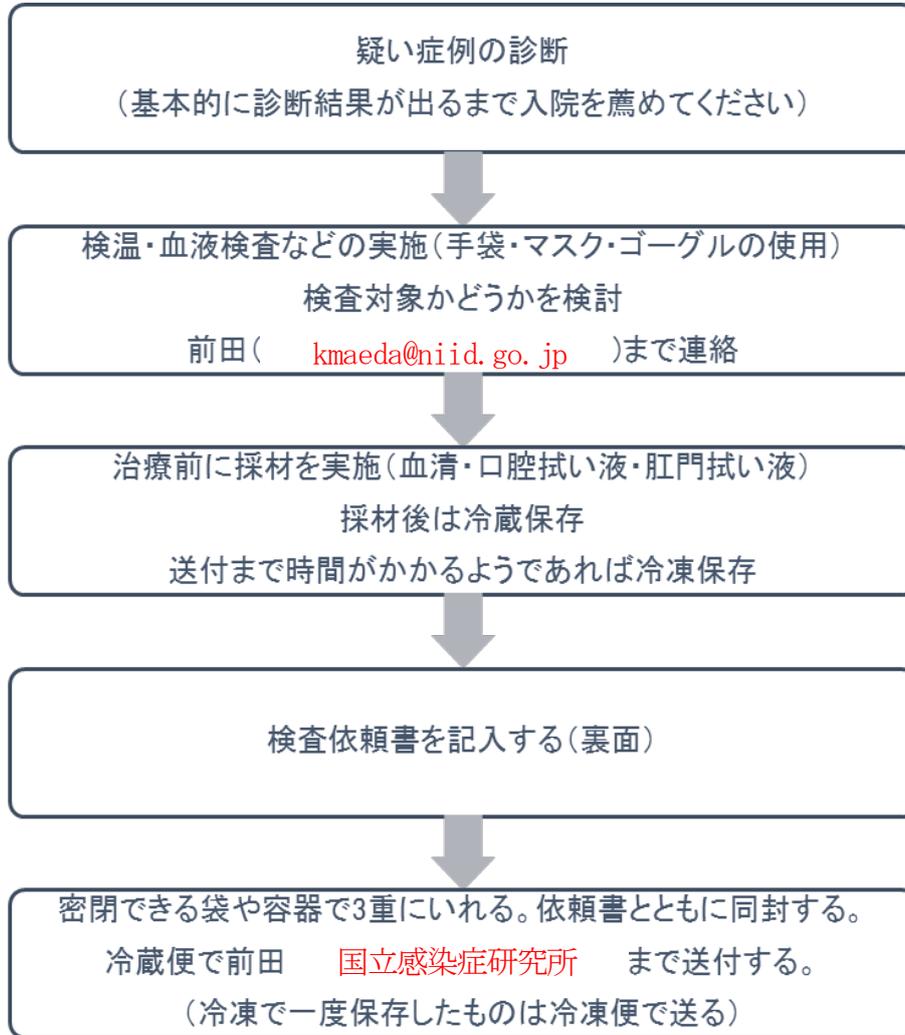
SFTSV 遺伝子陰性

SFTS 検査依頼に関して

検査推奨項目とこれまでの症例の傾向(個別に事前に前田(kmaeda@niid.go.jp)まで相談していただくことも可能)

- 発熱
- 白血球減少
- 血小板減少
- 肝酵素上昇
- 重症(ネコ40頭中22頭死亡)
- CK上昇
- T-Bil上昇
- 黄疸
- 嘔吐
- 消化器症状

SFTS 検査依頼の仕方のフローチャート



診断・採材時は手袋・マスク・ゴーグル着用

検体の取り扱い・汚染に注意

汚染した可能性がある場合は、0.5%次亜塩素酸ナトリウムで消毒

動物に咬まれた場合や、体液・排泄物に汚染された鋭利器材で受傷した場合
また体液・排泄物によって粘膜や損傷した皮膚が汚染された場合
至急、医師に相談してください。前田も相談にのることができます。

感染したか不安な場合

体温を10日程度測定。発熱があれば医師に相談

飼い主さまへの指導

体温を10日間程度測定して、発熱があれば至急病院に行くように伝えてください。

SFTS 検査依頼書

下記に記入し郵送願います。(□に✓、必要な部分には詳細記載)

国立感染症研究所獣医科学部 前田健 宛 (E-mail:kmaeda@niid.go.jp)

〒162-8640 東京都新宿区戸山1-23-1 電話 03-4582-2750(直通) FAX 03-5285-1179

依頼病院名		担当者名	
住所 (連絡先)	〒		
	TEL:	FAX:	
	Email:		

検体の種類	<input type="checkbox"/> 血清 <input type="checkbox"/> スワブ (<input type="checkbox"/> 口腔内 <input type="checkbox"/> 肛門)
検体採取日	年 月 日

患者(動物)の名前	居住地	都道府県:	市町村:
動物種	<input type="checkbox"/> 犬(種類:) <input type="checkbox"/> 猫(種類:) <input type="checkbox"/> その他 ()		
年齢	歳 カ月齢	体重: kg	性別:
飼育環境	<input type="checkbox"/> 室内のみ <input type="checkbox"/> 室内および屋外 <input type="checkbox"/> 主に屋外		
マダニの寄生	<input type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 過去有(年 月頃?)		
ノミ・マダニ予防薬 投与歴	最近の投与		製品名
	年 月 日		
ワクチン接種歴	接種年月日(最近)		製品名
	年 月 日		
発症年月日	年 月 日		
症状	<input type="checkbox"/> 発熱 <input type="checkbox"/> 白血球数減少 <input type="checkbox"/> 血小板減少 <input type="checkbox"/> 消化器症状 (<input type="checkbox"/> 下痢 <input type="checkbox"/> 嘔吐) <input type="checkbox"/> 元気・食欲低下 <input type="checkbox"/> その他 ()		

検査データ	発病初期 (月 日)	現在 (月 日)
発熱 (°C)		
赤血球 (μL)		
白血球 (μL)		
血小板 (μL)		
ALT(GPT) (IU/L)		
AST(GOT) (IU/L)		
CPK(CK) (IU/L)		
T. Bil (mg/dL)		
その他 ()		
その他 ()		
その他 ()		

発症からの経過 気付いた点	
------------------	--